

成績分析に基づく指導

独自の成績閲覧システムで対象者に応じた支援を提供

京都工芸繊維大学

京都工芸繊維大学のアドミッションセンターでは、学生の教育支援に役立てるために、独自の成績閲覧システムを開発し、活用している。年次の成績や修得単位数等のデータの蓄積・分析によって個々の学生の現状を把握し、学生との個別面談を通じて自律的な学習意欲を促すことが可能となった。

入学直後のつまずきが成績不振の原因に

京都工芸繊維大学のアドミッションセンターでは、従来行っていた入試分析のための追跡調査や入学前教育の取り組みを通じて、高校と大学の学びの間に大きな溝があることに気づいていた。これをうまく越えられず、大学での学習を軌道に乗せられない学生も少なくない。

「入学直後から大学での授業についていけなくなった学生は、学年が上がっても成績の低迷が続き、挽回が難しくなっている。従来力を入れてきた選抜方法や入学前教育の改善だけでなく、入学直後のつまずきの要因を把握し、取り除くことが必要だ。そこで、入学直後からの成績の推移に着目し、詳細な分析をすべきと考えた」と、アドミッションセンターの内村浩教授は語る。

そこで、アドミッションセンターでは、成績追跡調査のノウハウを生かして、個々の成績の特徴を分析するために「成績閲覧システム」を開発し、2008年に実用化させた。

学生の特性や状況に応じた適切な支援が可能

17ページに、成績閲覧システムで提示されるデータの一部を示している。

図表1は2年次のあるクラスの成績分布だ。横軸に修得単位数、縦軸に合格した科目の平均点をとっている。△や□は、それぞれの学生がどの入試方式で入学したかを表している。中央の四角い枠はクラス全体の標準偏差を示すので、枠外の学生に注目する必要がある。

Aゾーンの学生は、単位数、成績ともに良いグループだが、表彰や留学推奨などによって、さらに意欲や成績を伸ばすような支援が有効であるという。

Bゾーンの学生は、単位数が足りないうえに成績も悪く、早急な対策を必要とする。学業不振の原因は学生によって異なるため、一律の強制的な施策ではやる気や自立性を損ないかねない。まずは学習相談、生活相談を行い、状況に応じて経済的支援、補習などを組み合わせることが効果的だ。

Cゾーンは、成績は良いが単位の修得状況が悪いグループで、例えばアルバイトが学業の妨げになっていることもある。生活相談や履修相談を通して単位が取れていない原因を特定し、必要に応じて経済的支援などの具体的な手が打たれる。

Dゾーンは、単位は取れているが成績が悪いグループだ。単位を修得するためにひたすら大学へ来ている様子が想像される。こういう学生には職業体験などを勧めると、将来像の明確化につながり、意欲の上昇や成績アップが期待できるという。

このようにグラフを見ていくと、一口に「問題を抱えている」と言っても、学生を持つ特性や、置かれた状況がそれぞれに違うことが見えてくる。

データ画面を見ながら教員と学生が面談

このシステムの一歩の「肝」の部分では、入学してからの個人の成績推移が見えることだ。

図表2は、1年次後期から2年次後期までの、あるクラスにおける一人ひとりの学生の成績推移を示している。

とりの学生の成績推移を示している。図表1と同様、横軸には修得単位数が、縦軸には成績が示されており、各学生の3回分の調査結果が線で結ばれている。常に好成績を維持している者、成績が急激に伸びて学業不振から脱した者、反対に急降下してドロップアウトの恐れがある者など、個々の問題がくっきりと浮かび上がる。そこで、どういう指導が有効かという診断ができる。これは従来のGPAの成績評価では見られない、成績の背景にある状況を読み解くことにつながり、問題のある学生への個別の支援策の提示ができるようになった。

大学が実践している総合的支援システムとは、以下のようなものである。このシステムを閲覧できるのは、各クラスに2人ずつ配置されているスタディアドバイザー（教員）だ。問題のある学生、支援が必要な学生には、スタディアドバイザーから呼び出しがかり、データ画面を一緒に見ながら個人面談を行う。

個人の科目別成績の推移もグラフ化されるので、学生は自分の全科目の成績と修得単位数が一目でわかる。データを確認しながら話し合うことによって、学生は自分の厳しい状況に気づく

し、スタディアドバイザーはその学生の問題を掘り起こし、特性や状況に応じた適切な施策を提案しやすくなる。

「大切なのは、本人が自分の置かれている状況に気づくこと。グラフでの位置がわかれば、『このままではダメだ』と意識が変わっていく。大学は必要な指導はするが、あとは自分で学んでいく、そのバランスが大切だ。先に手取り足取りの学習プログラムを個々に実施するのではなく、まず学生の自主的な行動を促すことが重要」と語るのは、同センターの山本以和子准教授だ。

スタディアドバイザーと面談した学生の多くは、自分で問題に気づき、解決に向かって具体的な行動をとるという。

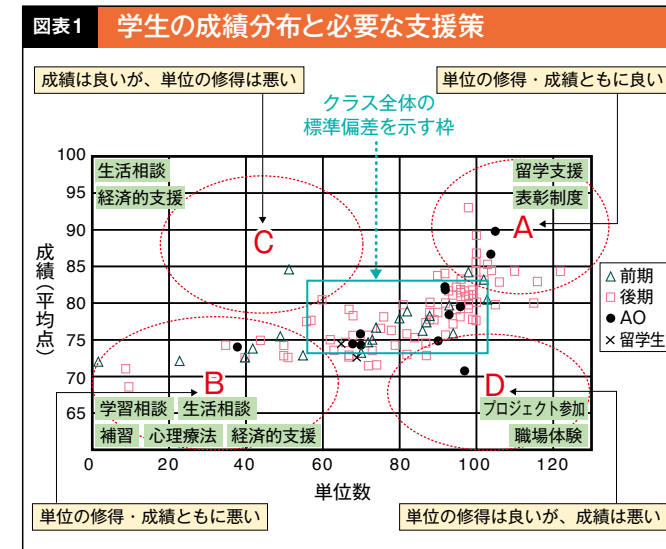
最終的な目標は自立した学習者の育成

「大学の最終的な目標は、自力で問題を解決できる『自立した学習者』を育てること。このシステムは、その目標へ向かうために必要な教育的診断を行うツールであり、成績で学生を管理する道具ではない」と内村教授は語る。

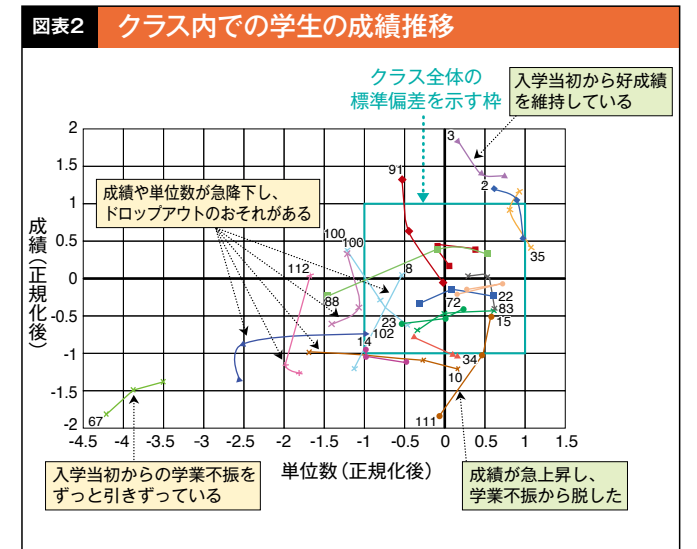
成績閲覧システムの本格的な活用はまだこれからだという。今後は退職教員やTA（大学院生）による学習相談、補習、学生同士のサポート、柔軟な経済的支援など、さまざまなメニューを用意したうえで、自立を促す支援を行っていく方針だ。なかなか呼び出しに応じない学生が深刻な心の問題を抱えているケースもあるので、臨床心理士によるカウンセリングも検討している。

このシステムを、成績以外の学生データを蓄積したポートフォリオと一体化させることも構想中だ。入学前教育で試験的に分析を行って見たところ、つまずいてしまう学生は、出身校や利用入試方式に関係なく存在することもわかった。完成すれば、より詳しい分析によって、多面的な学生支援が可能になる。学生の学習観が成績の伸びに影響を与えることもわかってきたため、入学者の意識調査データも充実させていく考えだ。

成績閲覧システムは、他大学へも積極的に提供していきたいという。すでに興味を持った大学からの申し込みもある。これからの時代、組織的な学習支援のためには、データの整備と分析が、重要な鍵を握っている。



プロットされる位置によって、学生の特性と必要な支援策が異なる。



学生を識別するための番号が始点となり、その後の成績と単位数の推移が線で結ばれる。